

社会人と自己啓発

～今いるところではがんばる～

東電不動産管理株式会社 加藤 洋一

● はじめに

人生は、現実生活と自己実現欲求との戦いである。「現実の生活を十分満足させるために、出世と幸福な家庭を築きたい」という欲求と、「ある夜目覚めて自分が本当に好きだと気づいたことに（損得抜きで）没頭したい」という欲求とのせめぎ合いである。この思いは、単に私だけの思いではなく、多くのサラリーマンの胸の内や、テレビドラマや文学作品の中でもひんぱんに渦巻いている。

そこで私は、自分自身を振り返りつつ、第Ⅰ部において「現実生活」を、特に若い人に向けて現実生活の充実と人生における仕事の意義を提言し、第Ⅱ部において、職業生活を続ける中でどのように「自己実現」を目指すかを提唱しようと思う。また、現実生活の欲求とのせめぎ合いを克服し、止揚していく鍵となるものが自己啓発である、ということも跡づけてみたいと思っている。

第Ⅰ部 セミプロそしてプロを目指して

人が独立して自由に生きるためには、何かしら自分の生計の道を確保していなければならない。そこで人はまず、何らかの仕事をしてお金を稼ぐために就職する。そしてほっとする間もなくもっと沢山お金を得て安定と満足を高めようと努力する。自分の欲求・目標達成のために、家族のためにがんばり始める。そのための能力開発の方法はいろいろあるが、その核心は自己啓発である。他人から言われるのではなく、成長のために自己投資をして、自分の時間を使って勉強したり創意工夫する。

そうやって一所懸命何年間かがんばれば、やがてセミプロ、プロフェッショナルの道が見えてくる。

1. 就職は人生のスタートライン

自分の現実生活を支える大事な就職ということが、皆偶然によって決められている。そんなバカなことはない、と思われるかもしれないが、実際には私の身の回りの親しい人のほとんどが就職を偶然で決めていた。あるいは、新入社員研修や中堅社員研修の会場で、「皆さんはなぜこの会社を選んだのですか。就職動機は何ですか？」と質問してみると、多くの場合「叔父さんに勧められたから」とか、「第1志望、第2志望とも落ちたから」というような、消極的で少しがっかりするような答が返ってくる。けれども、このような答はどここの会場でもほぼ同じであって、皆その時の家庭の事情とか、近い遠いという地理的条件などの偶然によって決められている。私の場合は、会社を選ぶというより、入れてくれそうな所を探して、何とか入れてもらえるようにいろいろと苦労した。これは偶然というよりは我慢であった。

しかし私は、このような、多くの人たちが偶然によって就職を決めることについて、悪いというよりもむしろ好感を持っている。そこに見られる偶然の事情や我慢の心情をおもえばかると、その方が案外人間的だと思うからである。そこには、人としての優しい感情が流れているように思える。さらには、世界史を飾るフランスの英雄ナポレオンが、「偶然を笑う者は愚か者である」と言っていて、人生における偶然の価値を尊重していることをつけ加えておきたい。

さて、問題はそれよりも実は就職した後の道のりの方にある。つまり就職は人生のスタートラインに並んだということであり、並ぶ前の経歴や事情は問われない。スタートラインに立つ！——そこから人生本番の始まりである。就職し仕事をして給料をもらうことによって、自分一人で生きて行く条件が整う。つまり、人生における自由と独立の原点に立つことができる。人生において就職が何よりも重要な理由はここにある。

幸いにして自由と独立のスタート地点に立てたならば、次は自分自身を成長させることである。与えられた仕事を正確に仕上げる力を身につけ、少しずつ複雑高度な仕事もやれるように、能力向上の努力をしなければならない。スタート時点において、そのような意識を自覚するか否かが、その後の能力向上のスピードに大きく影響するからである。その自覚は仕事面の能力向上だけではなく、人間性を磨くことにも向けなければならない。人間性の向上は、職場生活や仕事の共同体験によってなされるものだからである。

2. 3年間でセミプロになれ

いずれかの組織体に就職すると、仕事を与えられる。組織は仕事を分担して行うので、新入社員にも早速分担業務を与えられる。

分担業務が自分の興味と一致した人は嬉しいであろう。しかし、比較的そういうケースは少なく、与えられた仕事と自分の興味・能力・適性とが合わないという人の方が多いようである。しかし後者の場合、合わないと思う人の思いは、実は「合うか合わないかは一所懸命やってみないと分からない」というのが本当のところであろう。

学問や学生生活と、仕事や職場生活とは、根本の考え方や進め方が違うのである。学生時代は、自分の好きなことの勉強に力を注ぎ、好きな仲間とだけの交際を楽しんでいても良かった。授業料を払って、ひたすら自分の成長のためだけに月日を送る、つまり「自分のために」学問をし学生生活を送って良かった。むしろ、さまざまなことに純粹に興味を持ち、青春の情熱のおもむくままに感情を注ぎ込むことが理想であろう。しかし、仕事や職場生活は、そうではない。「自分のために」するものではなく、「他人のために」するものなのだ。そこが根本的に違っている。

「他人に役立つために」仕事をするということは、看護婦さんの仕事にはっきり表われているように、本当に相手の役に立ち相手を気持ちよくすることである。自分のことは2番目にする。仕事の進め方も、自分のスケジュール中心ではなく、相手の都合や注文を優先させて行うことなのである。

このように、学生から職業人になるということは、「自分のために」という意識をいったん抑えて、「他人のために」という意識へ大きく転換させて、仕事や人間関係をやっていくことなのだ。したがって、仕事の進め方も人間関係のコントロールも意外に難しく、一人前になるためにはある程度の経験を積む必要がある。

さて、以上の前提をもとに、職業人としてスタートラインに就いた人たちに、私は次のようなことを提案したい。

結論は、3年間でセミプロになることを目指せ、ということである。そのために、

- (1) 仕事が完璧にできるようになること。
- (2) 人間性を磨きつつ他人に尽くすこと。

限られた分野の仕事であれば、この2つを意識して懸命にがんばれば、3年間でセミプロになれると思う。企業にとってこのようなセミプロは大変貴重な存在である。

まず仕事を覚えるには、先輩・上司からよく教えてもらい、まじめにやってみて、反復

練習し、ノートに書いて整理する。理解不十分やできなかった点は、もう一度教えてもらったり調べたりやり直したりする。この一日一日の努力が、成功するのに一番大事な点である。それ程難しいことではないが、少しファイトや辛抱が必要である。

この努力を継続していると、少しずつ仕事が深く分かり始め、興味が湧いてくる。さらに続けて行けば、仕事の面白さも味わえて、段々と働き甲斐なども実感できるようになる。仕事がつまらない、やりたくないと思うのは、仕事への理解や認識が浅いうちである。その時期を乗り越えて深く理解できるようになれば、やがて未知の面白さが分ってくる。

このように仕事の覚え方は、江戸時代の職人さんが技能を覚える時も、現代の歌手が歌唱力向上の練習をする時も同じである。そして、われわれ勤め人が仕事を覚える時ともほとんど変わりはない。実力の向上は、確実な基本練習を積み上げることによって出来る。これを3年間実行し続ければ、普通の人でも仕事能力をセミプロ級に向上させることが可能である。

しかし、本当のセミプロになるためには、もう一つ人間性の向上も併せて目指さなければならない。これは前述のように、職場生活や仕事の共同体験の中で、他人（相手）に尽くすことの実践によって学ぶものである。それが人間性向上のための本筋の努力であるが、それを補完するための直接具体的なことを提示すると、次の5項目が挙げられる。

①挨拶をする ②譲ってあげる ③聴いてあげる ④会話を交わす ⑤お礼を言う

——これらを素直に実践していけば、仕事を覚える努力の時と同じように、人間性は磨かれていくのである。心のこもったマナーは、挨拶に始まりお礼を言うことによって完結する。ビジネス・マナーで、形から入ってしっかりと心をこめると、相手との熱意や絆を強くすることができる。是非とも実行を。

3. 一つの道でプロフェッショナルになれ

3年間でセミプロになるのは、目移りの激しいこのごろではかなり難しいことであろう。しかしそれを実践できた人の眼の前には、やりがいのある黄金の夏が訪れる。

3年間のうちにはつらいことや嫌なことも多いと思われるが、積極的に前へ進む気持ちで何とかやり抜いてほしい。我慢しきれずに今いるところを飛び出せば、またゼロからやり直しである。仕事や人間関係で障害に出会った時は、それをはね返すために自分自身を振り返ることである。幼い頃から今日までを念入りに思い浮かべて見れば、障害を突破するヒントが必ず見つかるものである。偶然が人生の進路を決めるように、自分を振り返る

中から何か強い力、障害を突破するエネルギーをもらうことがある。

3年間でセミプロになったならば、休むことなくその日から、プロへの道を一步一步進むべきである。セミプロとして正確に完全にやり遂げている仕事を、今度はより早く、楽に、安く、使い易く、効果が大きくなるように改善を目指す。自分が分担している仕事の改善を、他の人がやってくれることはない。分担業務の内容はセミプロである自分が一番よく知っているのだから、他人ではなく自分で改善するのが当然だ。身を乗り出して、一所懸命、創意工夫しよう。

レモンを手に入れたら

レモネードをつくれ

という言葉がある。創造性を考える場合の美しいフレーズであるが、眼の前にある限られた素材を使って、より有益なものを作り出すために創造力を発揮せよ、と言っているのであろう。素材(レモン)との出会いは運命であろうが、眼の前のレモン(与えられた仕事)と真剣に取り組んで、ミスや失敗などに四苦八苦しながらも、^{つい}終にレモネード(お客さまが喜ぶ新鮮な仕事)を作り上げることができたならば、苦労したあなたは“今いるところで輝く人”だ。苦しみ悩んだ後に、創造の喜びを心から味わえる人だ。

創造とは、この世の中に新しい価値を生み出すことである。何も無いところから有益なものを“生み出す”ことはなかなか難しい。新しく生み出さないまでも、新しい価値を“つけ加える”ことも改善であり、創造である。全く新しい事務処理のシステムを考案するのは優れた創造だが、事務処理手順の数カ所に変更を加える改善や、事務手続き用紙の様式をお客さまの希望に合うように変更することもまた、創造力の発揮である。

セミプロからプロを目指す時期に入ったならば、努力目標は改善や創造を積み重ねることである。改善や創造を3～4カ月に1回づつ仕上げていくとどうであろうか。1年間で3～4回、仕事の改善や創造がなされる。2年間では6～8の改善あるいは創造的な仕事ができる事になる。そのように明確な意識を持って、創意工夫しながら仕事と格闘する体験を2年間続けて行けば、配属された職場の仕事のプロになれるのである。3年間でセミプロに、引き続いて創造的に仕事を2年間進めて、都合5年間でプロになれるのである。

以上のような考えと行動で、仮に経理部なり情報システム部で仕事をしたならば、その部の仕事の全分野のプロとは言わないが、その部の仕事の1分野のプロフェッショナルになれる。1分野のプロとはいえ、プロの実力は職場のかけ替えのない中心であり、社外の別の組織にも通用する力である。さらに、その仕事に関連する国家資格を取得していれば、

その人の力の評価は普遍性を増すことになる。

けれども信頼に足るプロには、これに加えて高い倫理感を身に付けてもらいたい。セミプロには、仕事能力と人間性の向上を目標として提示したが、プロの目標は、仕事能力（専門能力）と創造力と人間性（特に倫理感）の3つである。

組織人、個人、いずれの場合にも社会人として生きていくには、信頼感、責任感、安心感が必要であるが、それらの源泉は人間としての倫理である。人の道だけはどんな場面に出合っても守らなければならない。特に仕事のプロの言動は周囲に重要な影響を与えるので、倫理を守ることが特に大切だ。難しい場面でも、どうしたら倫理を守れるかということ懸念に創意工夫してほしい。それを実現するのがプロフェッショナルである。

さて、以上の第Ⅰ部を要約すると、偶然就いたどのような仕事であれ、今いる職場の眼の前の仕事に一所懸命取り組む。3年でセミプロに、5年でプロになることを目指す。それは、普通の能力の持主であれば可能なことなのだ。その現実的な努力（能力と人間性の両方という当たり前の努力）によって、人は社会人として自由と独立を確保できる。現実生活の幸福への道で大事なことは、就職後の3年、5年の仕事への努力にかかっている。

第Ⅱ部 ハングリー精神から自己実現へ

人は経済生活が安定しないと心が落ち着かない。不安や焦りで大事なことを忘れてたり、物事を計画的に行うことができなかつたりする。

仕事の1分野のプロに成長すると、そのようなことが消え去り、自分の10年後や一生を考えるようになる。自分が本当に好きなことは何なのか、自分の能力や長所をより活用するにはどうしたらよいか、仕事のどの分野に伸びて行けばよいだろうか、自分の自己実現の欲求とは何だろうか。そのようなことを真剣に考えるようになる。

さまざまな欲求と欲求の葛藤を経験し、悩み、あきらめ、焦点を絞って、自分の道を歩み出すようになるのは、自己啓発をどこまで続けられるかどうかにかかっている。自己啓発が、自分の生きる道を追求する^{エネルギー}原動力なのだ。

社会人となっても自己啓発を続ける理由はここにある。

4. 成長の^{エネルギー}原動力は自己啓発

自己啓発（セルフ・ディベロップメント）とは、他人から言われるのではなく自分から

気づいて積極的に学ぶことである。主体的に自学自習することである。

学生が主体的に学ぶということは、たとえば講義を聴く場合にも、講義内容を自問自答したり想像したり、あるいは質問をしたり意見を発言したりして学ぶことである。加えて、講義に関連する本やレポートを読んだり、資料や統計数値に当たってみることである。これらのことは、就職した後に時折り外部のセミナーを受講する時も全く同じである。さらに、自分の仕事の専門能力を高めるために、関係のある国家試験等、各種の資格取得を目指すことも、近頃は多くのビジネスマンが実行している。

しかしこれらのことは世の中でよく見られる普通の現象であるが、社会人（職業人）が自己啓発をなぜするのかという原因は複雑である。

18歳で電力会社に就職した私の自己啓発の動機は、学歴コンプレックスを和らげるためであった。職場を見回すと、各課長は皆一流大学卒業者であり、仕事のできる先輩や仲間は何らかの資格取得者であった。仕事の理解が悪く実行力にも元気のない私は、焦ったり不安を感じた。仕方なく私は自学自習を始めた。しかし技術や電気が苦手な私は、一番易しい電気の国家試験（電験3種）を2年連続落ちた。3年目は、某大学の第2電気工学部（夜間部）を受けたが、これも落ちた。理由は、自己啓発の本当の必要性に気づいて学習した訳ではなかったからだ。私は学歴コンプレックスと出世のために、嫌々ながら勉強機に向かったのだ。好きでもなく、意欲もなかったから、少しも集中しなかったのだ。

しかし、私と同じような理由で自学自習をしている人が沢山いる。経済状況の厳しい今日、多くのサラリーマンが、リストラの対象にならないように、有利な転職ができるようにという理由で、資格取得だ、キャリア開発研修だというように、一面的理由で踊らされている。

私の苦い失敗の経験からのアドバイスは、本当に好きなことを仕事にすることができるように、そのために自己啓発をしてほしいということである。あるいは、自分の今の仕事を好きになるように、そのために仕事を深く深くマスターする（セミプロ、プロになる）ために自己啓発（主体的な自学自習）をしてほしいということである。

私は今まさに、『自分らしく生きるためのキャリア開発』という本（あしぎき書房刊）を書き上げたばかりだが、そこでは自分の経験を本当に大事にして、自分自身の頭や心で見定めて、自分らしく生きるための経歴（キャリア）を、自分の足と情熱で切り拓くことを奨^{すす}めている。転職や出世だけを願って自己啓発に励むことに対して、今は「他にも幾つかの道があるよ」とアドバイスしたい。私のような失敗をくり返さず、自分自身を振り返っ

て内面を見つめて、本当に「自分らしく生きる」、その力をつけるための自己啓発をしてほしい。

かつて上智大学の渡部昇一教授はベストセラーとなった『知的生活の方法』（講談社現代新書）の中で、頼山陽の“汝草木と同じく朽ちんと欲するか”という文章を引用していた。「草も秋になれば枯れ、木も伐られて薪になる。そしてそのことは誰も覚えていない。人間だって大部分そうなる。」という認識は、渡部少年を“ひやりとさせた”が、20年前の私の心をも震わせた。60歳を越えた今は、“ひやりとさせた”と言うよりも、ひたひたと迫って来ると感じる感じである。

現実生活のハングリーな状態を充実させ安定な状態に変えるためのエネルギーは自己啓発だ。だが、自己啓発というエネルギーの効用はそれだけではない。ある夜目覚めて、自分が本当に好きなこと、本当にやりたかったことはこれだと気がついた時、その欲求なり目標を達成させるエネルギーが、自己啓発なのだ。欲求・目標さえハッキリとつかめれば、後はもうお金がなかりうが時間がなかりうが、少額のお金で寸暇をさいて、夢（好きなこと）の実現に没頭できる。

夢こそが自己実現の欲求であり、その実現に真の努力を傾けることこそが、人が生きてく証ではなかりうか。他人から言われてではなく、自分の夢・ロマンの実現のために、何かなんでもやり抜くこだわりが自己啓発であり、セルフディベロップメントではなかりうか。

5. 真面目な努力が自己実現に迫る

フランスの女性経済学者コンドミナスさんと、東電学園（東京電力の企業内学園）の山林を散策していた時、彼女が「どんな国にも、大学教育や正規の高等教育を受けていなくても、社会の枢要な地位について立派な仕事をしている人がいる。その秘密、原因を明らかにすることが私のテーマの一つだ」と言った。その場の雰囲気では、「日本独自の企業内教育や、日本の小中学校の先生の心意気のせいだ」などと言ったが、本当はもっと「自己啓発をするからだ」ということを伝えなかった。かなり精神的な内容をうまく伝えられなかった。それから10数年を経た今日、再びその中味を具体的に伝えられるであろうか。

人は大きな成長をすることがある。就職後5、6年で仕事の1分野のプロ（いわゆる“それで飯が食える人”）になれると私は述べたが、そこからさらに「ある仕事の全分野のプロ」として、その仕事を通じて社会を動かすほどに大きく成長する人がいる。そのような、ド

ラマチックな飛躍ないしは変身^{メタモル}の秘密や原因は何なのであろうか。

それを明らかにするために、唐突で恐縮だが、ファッション・デザイナーのシャネルの成長の跡を振り返ってみたい。シャネルは少女時代修道院で孤児として育つというハングリーな体験をしながら、後年、仕事に徹してファッション界の世界最高峰となり、死後も名声を高めている真のプロだからである。

ガブリエル・シャネル（1883年生、1971年死去、87歳の生涯）は少女時代、フランス中央山岳地帯の古い修道院で、敬虔な修道尼^{シスター}のもとに孤児としての日々を過ごした。12歳の時に母親が死に、貧しい行商人の父親は、娘のシャネルを孤児院に預けたまま行方をくまらしたからである。彼女はそこでカトリックのシスターから刺繍や編み物やはた織り、あるいは繕い物というような服飾の手仕事をしっかりと仕込まれた。山岳地帯の自然の中で、神への祈り・小動物の世話・朝晩冷たい水で体を清潔に洗う、等々の修道院・孤児院生活、12歳から18歳までという多感な青春期を、実に7年に亘って過ごした。生前のシャネルが隠し続けた経験であった。

彼女は18歳で世の中に戻った。才能のある人でも、世の中でプロとして活躍する前に雌伏（将来に活躍の日を期しながら、他の下に屈従すること：『岩波国語辞典』）の時期がある。彼女も騎兵将校との愛人生活を送り、一時期ミュージック・ホールで歌を唄ったりもしている。その時についた愛称が“ココ”なのだ。

シャネルの雌伏期間は比較的短かったが、私の場合は正に雌伏10年。18歳から27歳まで海浜の火力発電所（いわば電気の生産工場）で夜勤を含む3交替勤務に従事した。私は2歳で父を、3歳で姉を、そして小学校3年生の春に母が再婚して行った。祖父祖母の家の2階や、火力発電所の独身寮で青少年時代を一人で過ごした。祖父は本当は愛情深かったが、厳しかった。独身寮は、正月休み、帰る当てのない私は、人気のない寮内を歩くのが淋しかった。

こうして比較してみると、スケールやドラマ性は大部小さいが、生い立ち、境遇、青春時代の悩みと焦りなど、シャネルと似ているようで親近感を持ってしまう。彼女が嘘をついてまで孤児院生活を隠したことが、私にはよく分かる。

そんなシャネルの現実生活を保護して、一躍上流社会の生活を案内し、ファッション・デザイナーの道に（職業人生のスタートラインに）就けてくれたのが、バルサンとカペルという二人のお金持ち騎兵隊将校であった。偶然とはいえ、彼女は男運にめぐまれたし、清潔感、シンプル、活動的（スポーツ好き）な姿、等々は当時としては貴重な個性として

魅力溢れるものだった。ファッション・デザイナーのプロになるまでの期間は、水を得た魚のようにアツと言う間の短さだった。(修道院でシスターに指導された清潔と勤労の生活習慣、特に服飾の手仕事の技能はシャネルの仕事の基礎を作っていた。)

その後のシャネルの大きな成長は、優れた芸術家との数多くの出会いと交流から得られていると思う。第1次世界大戦と続く20年代、30年代のパリで、ピカソ、ストラヴィンスキー、ディアギレフ(舞踏家、ロシアバレエ)、ルキノ・ヴィスコンティ(映画監督)、ジャン・コクトー(詩人)、その他の文化史に名を残す優れた芸術家と交流し共同で仕事をした。そこから得られた教養、見識、磨かれる芸術的センス。それらが彼女を世界的芸術家のレベルに引き上げたのであろう。

見逃せないのは、シャネルが12～18歳の修道院生活で形成した人間の基本が、多くの芸術家との交流の中で自分を見失なわず、彼らからの養分を吸収し、逆に与えもして、相互啓発の成果を得ていることである。一流の芸術家たちからシャネルが得た教養とオーラの質量は、他の人が遠く及ばない。

加えてシャネルは、恋愛に溺れない女性だった。二人の騎兵将校とも、数多くの男性芸術家とも、そしてイギリス最大の財産家であるウェストミンスター公爵とさえも、^{つい}終には別れてしまう。(一度も結婚していない。)

私の場合は、凡才を引き立ててくれた師は4人いてくれた。東電学園時代、少数の研究会で一心に指導してくれた日本大学教授の高須裕三先生(私が20代半ば)、会社の直属の上司だったH氏とS氏(30代半ば)、さらに(社)日本産業訓練協会へ出向中に研修講師の中味と教え方を指導してくれた開発訓練部長だった佐藤薫先生(40代前半)。4人の師に指導してもらったが、ビジネスの基礎と人材育成の仕事の基本を少しづつ身につけたぐらいであった。研修の限られた一分野の講師ができるだけのプロとなって定年退職を迎えるが、プロと言うのも恥しい程の、狭い小さなプロだ。残念ながら、私は飛躍も変身もできなかった。

これはシャネルと私の才能や資質の大きさが異なる。シャネルは、自分の頭で考え、他人から吸収し、それらを自分の仕事に移し込むように敢然と実行した。仕事に集中し、終始自分の手を使って創造物を生み出した。多額のお金を持つようになって、享樂せずに勤勉な生活態度を貫いた。生涯「清潔」にこだわって、「清潔こそエレガンスの基本」という信念を身をもって示し続けた。ガブリエル・シャネルは、人が思う以上に仕事、仕事、仕事に没頭した。87歳で亡くなる数日前まで仕事を続けていた。

シャネルの場合は、才能と共に人が思う以上に、仕事への集中的な努力の日々が、大いなる自己実現に至ったのであろう。

6. 読書を生涯の友として

「始めに言葉ありき」と言われるが、人間の思考力は言葉によって養われる。

一流のプロとの会話や、何気なくもれ聴いた言葉の影響を、これまでの自分の仕事になかった創作物として、自分流に懸命に仕上げていく。苦心さんたんしながらも新しい仕事の完成に向かって前進していく情熱バイタリティーの持主が、大いなるプロへと飛躍し変身していく。

くどくシャネルで恐縮だが、彼女は「人は若い頃に偶然就いた仕事に真剣に取り組んで、心を込めて深めていくことが大事だ。人生で大切なことは仕事に励むことと読書だ」という意味のことを告白している。興味深いことは、シャネルの言っていることの順番である。1番大切なことは仕事に励むことであり、2番目に読書だ、という指摘だ。正に至言であり、真実だと思える。大成した人は仕事に全てを賭けてその結果成功した人である。

私も少年時代から読書が友であり、60年の長い間に亘って人生の杖とも頼んできた。しかし、仕事への集中力は続かなかった。一般的に、一流の人は仕事第1であり、二流の人は読書第1で仕事が第2である。一流の人は読書の栄養も仕事に生かす。二流の人は読書に慰めを求めてそして流される。私は二流であった。

最後に負け惜しみを述べれば、読書による慰めが凡人の思い・を長持ちさせる。読書は、気持ちや身体が疲れた時、家族とマサツがあった時、会社で嫌な目にあった時、美やドラマが欲しい時、それぞれ凡人の読者の味方になってくれる。本を読むこと、二流の人との友情は心置きなく長持ちする。実際に実現しない個人の思いや願いを、いつまでも見果てぬ夢として維持してくれる。もっとも、そんなことだから変身できないままに私は還暦を越えてしまった。

定年退職後に、会社や上司からフリーとなって、自由な読書生活に入れることは心楽しい。ハングリー精神や現実生活を止揚して、真の自己実現の欲求を達成できなくとも、それに近い情態に到達して、同好の士と交流（喫茶店などでコーヒーを飲みながらの会話を）し、毎日本を読む。そこで得たエキスを、細々と続けている人材育成、研修講師の内容に生かせればよい。年と共に、同好の士との交流は少なくなるかもしれないが、読書の方は大丈夫であろう。体力の衰えは気力の衰えからと言われる。読書で常に気力をリフレッシュしていこうと思っている。